報告　書評・芸術評

書評『自分の小さな「箱」から脱出する方法』

山中　享[1),2)]

1）リハビリテーション・エンジニアリング 編集委員会
2）LOOVIC 株式会社 代表取締役

自分の小さな「箱」から脱出する方法
アービンジャー インスティチュート　著

『自分の小さな「箱」から脱出する方法』(2006年）は、人間関係の問題を「自己欺瞞」という視点から捉えた一冊である。

本書でいう「箱」とは、自分は正しく、問題は相手にあると自己正当化し、相手を、意思を持つ一人の人間として見られなくなった状態を指す。箱に入った者同士が互いの反応を誘発し、関係が悪化していく過程が、職場や家庭の場面を通して描かれる。

この「箱」は、ライフステージの移行期にも現れやすいのではないか。進学、就労、地域での生活へと場が移るとき、家族は「この子のことは自分が一番わかっている」と考え、支援者は「専門的にはこの方法が正しい」と考え、受け入れる側は「前例がないので難しい」と考えることがある。

これらに共通するのは、自分の判断を正当化することである。いずれも善意や経験に支えられているからこそ、本人の意思を確かめる過程が省かれやすい。移行とは、本人の意思決定の比重が大きくなっていく過程でもある。しかし、周囲が箱に入ったままでは、本人が選ぶ機会そのものが失われる。

1）リハビリテーション・エンジニアリング 編集委員会
2）LOOVIC 株式会社
　神奈川県横浜市港北区

当然ながら、移行期には支援に用いる道具や方法も切り替わる。ある環境で最適化された支援が、次の環境では通用しないこともある。

私は、視空間認知に困難のある子どもに家族として向き合った経験から、移動支援技術の開発を始めた。当初は、進行方向を正確に伝えることが重要だと考え、案内を増やす設計を試みた。しかし、支援が過剰になると、利用者が自ら考え、周囲を確認する余地を狭めてしまうことに気づいた。結果として、周囲への注意が薄れ、安全面にも課題が生じてしまった。

もっと早く気づくべきだったが、当時の私は、正確に案内することが最善だという自分自身の「箱」に気づいていなかったのである。

本書が伝えるのは、自分の外にいる相手を、自分と同じように意思を持つ一人の人間として、まっすぐに見ることの大切さである。本書は、私がそれまでの取り組みを振り返り、当時の考えを問い直すきっかけを与えてくれた。

同じ示唆は、移行期に関わる読者にも開かれているかもしれない。周囲の判断が間違っているという意味ではない。ただ、この時期の支援では、技術や制度をどう整えるかと同じくらい、関わる者が本人をどのように見ているかが、その後の生活を左右するのかもしれない。

本人が次のライフステージへ進むための選択肢を、対話しながらともにつくる。そのために、本人を取り巻く家族、支援者、開発者がそれぞれの「箱」に気づき、視点を切り替えることができれば、出来うる策としての選択を重ねつつ、次の道を拓いていけることを願いたい。